

東日本視察・交流記(4) 仙台市へ。ワークショップに参加。

ホテルの朝食をとる。船引ビジネスホテルと言っても、家族経営なので1階は家族の生活空間にもなっている。朝食も旅館の和定食のように食べごたえのあるものだった。

9時50分発、磐越東線で郡山に戻り新幹線で仙台へ。11時半に到着、仙石線で一駅の榴ヶ岡(つつじがおか)で下車。軽く昼食をとり、榴岡公園を散策しながら宮城県婦人会館へ。

NPO日本ファシリテーション協会東北スクエアの「やるぞ!東北!アイデア会議!—復興プランを我々で考えてみよう」に参加するのだ。スクエアのメンバーである佐々木さんが6月例会の当番幹事である。受付で佐々木さん(写真左)と初の対面、握手を交わす。

佐々木さんの司会で会が始まった。ちょうど震災3か月目でもあり、参加者19名、今までで一番多いという。(1か月前も集まったが、話していると泣いてしまう人たちもいたとのことである。たとえば、仙台市職員の方は、被災者への対応の仕事をしてきたが、被災者の辛さをずっと受けとめ胸にためてきたのである。3か月目はだいぶ落ち着いてきた、という。)

まず発声練習などしながら気持ちをほぐして、ワークショップに入っていた。

それぞれ自由に復興プランを出し合う、そして、それを「すぐできそう」「なんとかできそう」「将来できそう」の3つに分け、全体としてのキーワードを取り出すという流れである。前半はテーマ別(農林・漁業、教育など)、後半は地域別(沿岸部、平野部市街地、平野部農村、山間地)に4、5人ずつ分かれて議論するのだ。

そして、さいごにグループ発表が行われ、みんなで意見を共有するのである。(写真左下)

大まかに意見を紹介すると、「すぐできそう」は、「心ある個人に農業、漁業への投資家になってもらう」、「被災者がビデオメッセージをつくり、行政に届ける」、「地元の新聞でバッグ(写真右下)をつくって、首都圏でたこ焼きを入れて売る」、「自転車社会にする/ツールド東北を開く」、「町カフェを中心に地域通貨を広げる」など。

「なんとかできそう」では、「農家と消費者が直接つながるように。災害時の協力にもな



る」、「沿岸部と内陸部で、双子都市提携をする」、「アイスプラントを特産品に」、「地元の木材で復興の住宅を建てる」、「法人に内部留保から資金提供してもらい、将来、法人税を軽減する」、「内陸の耕作放棄地などを被災農家の営農のために使う」などがあった。



「将来できそう」では、「水田に菜種やヒマワリなどのバイオ系植物を植え、バイオエネルギー産業を進める」、「自然エネルギーへの転換で雇用創出を」、「東京、大阪、福岡に東北の産物のアンテナショップをつくる」、「漁業と農業が結びつき、自然エネルギーを活用するエコタウンを中山間地につくる」、「防災教育を織り込んだ東北観光を展開する」などである。

「好きな食べ物」などの自己紹介を織り込みながら、議論はずんでいった。盛りだくさんだったが、無事 5 時半に終えた。そして、懇親会場に移り、話はさらに続いた。

HP 作成などの IT 支援の仕事をしているカツアキさんは若林区の住人、さいわい家族は無事だったが、家は全壊。津波が来るなど予想もしてなかったという。今、民間借り上げの応急仮設で暮らし、仕事も再開している。そんななか、ワークショップに参加したのである。

トシロウさんは、内陸部の住まいである。加入しているアジア協会アジア友の会のつながりで、やったことのないボランティア・コーディネートをやることになって南三陸町を支援している、という。彼の「エコタウン構想」には私も強い共感をもった。彼はまた「MOOSOO (妄想) 研」という冗談的な会をつくり、明るく夢を語ろうと呼びかけている。東北人気質からどうしても口が重くなるこの地では貴重な存在である。

そのほか、リスクマネジメントなどのコンサルタントをしているイチノブさん、大崎で地域づくりの NPO をしているジュンコさん、社会保険労務士の仕事をしているヤスシさんから多くの方と知り合うことができた。

楽しかった会も終わり、私は古川在住の佐々木さんの車に乗せてもらって一路古川へ、1 時間余りの車行である。佐々木さんは「道路がデコボコだから気をつけてください」という。たしかにそうだ。とくに橋げたと道路の間はアスファルトで応急措置をしているが、大きな段差がある。「3.11 のあと、復旧に取り組み始めたのですが、その後また大きな地震があり、復旧の意志がそがれてしまったのです」ということだ。

これから 3 泊する東横インに着いた。「今日はお疲れさまでした。ありがとう」と声をかけて車を降りた。「それでは明日、9 時半過ぎにスタートしましょう。おやすみなさい」と佐々木さんは家路に着いた。

(6 月 11 日、終り)